

皆様、お元気でお過ごしでしょうか？ようやく梅雨らしくなったと思いきや台風を連れての予想外の大雨。今年のお天気も侮れませんね。さて、お待たせ致しました会報をお届けします。この夏も皆様、お元気でお過ごし下さい。(千)

☆活動報告と活動予定



日程	内容
平成 29 年 1 月 28 日	新年会：アトリウム長岡にて
平成 29 年 4 月 22 日	総会：出席者 29 名、委任 8 名、欠席 4 名
平成 29 年 7 月 1 日	第 1 回伝説の地めぐり研修旅行 (今秋 2 回目を予定、日程は未定)
平成 29 年 7 月末日	「語り継ぐ長岡の伝説」出版
平成 29 年 8 月 22 日・23 日	長岡民話百物語：アオーレ長岡にて
平成 29 年 8 月 26 日	13:00：例会 14:00：百物語り反省会・出版記念会 アトリウム長岡で開催

お知らせ



- ・安部さん、外山さんがお亡くなりになられて、はや半年が過ぎました。未だに例会に出席するたびにお二人にもうお会いできないのだという事実打ちのめされそうです。
「安部さん。もっと貴女のお話が聞きたかったな！」
「外山さん。もっと貴方と一緒に語りたかったな！」
民話の会のなかでも取り分けお元気で明るいお二人でした。ご冥福をお祈り致します。
- ・今号では、安部さんの語りを書き起こしてみました。安部さんのお声を思い出していただけると嬉しいです。なお、「安部昌江昔語り集」のCDがございますので、ご希望があれば貸し出します。お問い合わせは事務局までご連絡ください。

白羽の矢が立つ

高橋 実

白羽の矢が立つという言葉は、今は大勢の中から選ばれる幸運な意味で使われる。

ところが辞典などでは人柱に選ばれるが原点になっているようだ。辞典など見ると《人身御供(ひとみごくう)を求める神が、その望む少女の家の屋根に人知れずしるしの白羽の矢を立てるといふ俗説から》多くの中から犠牲者として選び出されると書かれている。

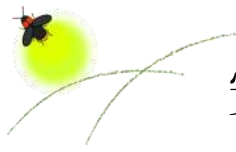
私が高校生の頃高橋篤三郎さんから聞いた「人年貢取るむじな」という話もそれと関係しているのだろう。六部が村を訪ねるとある家で家中で悲しんでいるので、その理由を聞くと毎年八幡様が「人年貢」とするのに今年はその白羽の矢が家に立って悲しんでいるという話をする。六部はそれを聞いて代わりに自分が人年貢の箱に入るといふ。夜中に箱からでて縁の下に隠れているとムジナが出てきて「信濃の国のしっぺい太郎にきかせるな」といふ唄を歌いながら踊るのを聞く。信濃の国しっぺいた太郎とは犬の名だった。その犬を借りてきてムジナ退治をしたといふ話だった。人年貢すなわち人身御供 神様に命を捧げることである。

「雉も鳴かずば撃たれまい」の話はよく知られている。キジは鳴くことがなかったら獵師に気づかれて撃たれることもないだろうに、といふ意味のことわざとしても使われる。転じて、無用なことを言わなければよいのに、無用なことを言ったばかりに災難を被っている、といった意味合いで用いられる言い回し。長野県の犀川に伝わる話として病弱な弥平の娘がしきりに小豆まんまを欲しがると、貧乏で手にいれられない。そのため一握りの小豆を盗み、娘に食わせる。娘はそのことを話してしまったため、庄屋から盗んだ小豆のことがばれてしまう。娘の父親の弥平は洪水を防ぐために築いた土手に人柱にされてしまった話である。雉も鳴き声をたてたために獵師に撃たれてしまった。

鎌倉時代のこと越後国頸城郡の猿供養寺村(現・新潟県上越市板倉区猿供養寺)を訪れた遊行僧が、地すべり被害の絶えなかった土地の人々のため、自ら人柱となって災禍を止めた。この話は長らく伝説とされていたが、1937年(昭和12年)3月10日、地元・正浄寺裏の客土中から大甕に入った推定年齢40歳前後の男性人骨(脚が太く腕は細いことから旅人であり肉体労働者ではなかったと思われる)が座禅の姿勢で発見され、史実であることが確認された。

こうして洪水を防ぐ土手の工事や城郭建設のために人柱を建てることもあったようだ。日照り・水害・冷害など自然災害は神の怒りと考え、生きた人間を捧げて、神の怒りを解こうとしたことであつたであろう。柳田国男は、全国にこうした話が山伏・六部・盲僧などが犠牲になっていることから彼らによってこの種の伝説が伝播していったと説いている。





安部さんが語った昔話。



一里の豆腐

安部 昌江

今年は春から自然災害で、大地震だとかこの間は豪雨で大変でしたけど、明るいニュースと言えば、サッカーのなでしこジャパンがワールドカップで優勝しての、うれえーしかった。やっぱり、女子の力ていうのは、たいしたもん。昔も元気な婆さんが、なかなか頭のいい婆さんがいたという話をこれからしたいと思います。まあ一つ聞いてくんなさい。

むかーしあったてんがの。

ある村に立派な門構えの金持ちの家があったと。そこは、一人娘がいての、年頃になったんだんが、婿もらわんばならん、だろも、なかなかそこん家（うち）の主人が気に入った様な婿が見つからんがらと。

そうゆうんだんが、塀の外に「婿、募集」の立札たてたと。そしたら、次から次へと、三人も男が、「俺を婿にしてくれ」と言（ゆ）うて来たがらと。そうしたら、その主人は、その三人を一緒に屋敷の中に住まわせて様子を見ることにしたがらと。そしたら、その一人お嬢様は、

「やらやら、おら、こんげまあ三人も一緒になんか住まわせて、どうすつつもりらるか、おら、こんげん家はやら。」そう言うての姿くらまして家出してしもたがらと。

そうしたらまあ、家中大騒ぎになって、あっちこっち探するもの、なかなか見つからん、そうしたら、その三人の男にも、「おめ達。こうゆう時に、なんか役に立ってくれや。」と頼んだと。

その三人の男とゆうのは、最初に来たのが八卦見の男での、二番目が潜り、水ん中に潜って、なんか探したり、とったりすんのが商売。三番目は医者だったと。そういんだんが、まず最初の男がの、占いなんだんが、じゃんじゃらじゃらとやって占ったら、「これは岡にはいね。水の底だ。」そうしたら、二番目の男が、すぐや村を流れている川の中に潜って行って探したら、水の底にお嬢様がいての。抱き上げてすくい上げてきたと。そうしたら三番目の医者が、すぐ脈をみて、「あっ、まだ脈があるな」そう言うて、水を吐かせて、手当てしたら息を吹き返したと。

そうしたら、その三人の男達はの。「俺がお嬢様を助けた。俺が助けたすけ、俺が婿だ。俺が婿だ。」と、言うての。八卦見は俺が場所を見たてんば助からんかったと言うし、潜りは、いっくら場所がわかったたて、俺が潜って行ってお嬢様を助けだしてこねば、だめだったと言うし、医者も、いやいやいっくら連れて来たて、俺が手当しんきや助からんかった。と言うての騒ぎになって、その主人もの。どうしてみようもねんだんが、庄屋さんに裁いてもらう様に届け出たと。

庄屋も、その話を聞いてなるほど、それぞれの理屈がある、裁きがつけらんね。三晩も寝えらんねでの考えたろも、いい案が浮かばね。

「ようし。あしたの朝でもはあよ起きて、村でも騒いで、村の評判でも聞いて何か役に立つかな。」と言うて、朝、はあよ起きて村を歩き始めたと。

まだ、早いんだんが、まあ暗かったと。だろもの。たった一軒だけ豆腐屋がの、爺さんと婆さがの、ちっこい灯りで一生懸命豆腐作っていたと。何やらしゃべり声が聞えるだんが、そうっとその豆腐屋の軒下へ行って聞いていたと。そしたら婆さが、

「ほんね、まあ。人（ひっと）のこんだろも、はがゆいの。」

そしたら爺さが「何がかや。」

「おらとこの庄屋さんだこての。金持ちの家の娘がやっと助かったてがね、婿一人の話、決めらんね。ほんね頭（あつたま）の悪い、知恵のねえ庄屋ら。」

「ばか、そんげなこと言うなや。そんげなことが庄屋さんの耳に入ったら、おおごとらろ。おらったみてな貧乏人が。」「おっこ、理屈にの、貧乏も金持ちもねえがいの。」

婆さてやの、今も昔もきつつくて、元気がいいがいの。

「そうせば、おめえ、だれが婿にいいと思うがや。」

「そんげの決まってるこてね。まずの、八卦見の男がみたてんば、後のもんは動かんかったろいの。そういんだんが、八卦見らこてね。」

そうしたら、それを外で聞いていた庄屋さんは、にこっとしてすぐ引き返して行つての、金持ちの屋敷に行つて

「八卦見がみたてんば、後のもんは動かんかったすけ、八卦見にしろ。」と、そうゆう裁きをつけたと。

「それにしてもあの豆腐屋の婆さは、なかなか知恵があるな。どれ程の知恵があるか、ひとつ試してやろう。」というがんでの、使いの者をやって婆さを呼ばつたと。

そうしたら爺さ、心配しての。

「ほらみろ。おめが庄屋の馬鹿だの、知恵がねえなんて言うすけ呼び出しかけられて、何されるかわからんぞ。」婆さは、「いやあ、おら、何も悪いことなんか言うてね。なんともね。」そう言（ゆ）うて、庄屋さんの屋敷へ行つたと。そしたら、庄屋さんが待つてられての。

「豆腐屋の婆さてや、おまえらか。」

「はあ、おら、豆腐屋だろも、何か注文がありますかいの。」

「おお、あるぞ。明日の朝げまでに一里の豆腐こしらえて持って来てくれ。」そう言うたと。

婆さは、「はいはい。ありがとうございます。」と言うて帰つてきて、

「爺さ爺さ。はよはよ、豆、いっぺことふやかしてくらっしええ。明日の朝までに一里の豆腐こしらえんば、ならん。」爺さたまげて、

「なに、一里の豆腐。一里なんて、となりの村までいかねばならぬような豆腐、なんでこしらえられろば。それが罰というもんぞ。」

「いいすけ、ふやかした豆から曳いてくらっしえ。」と言うての、二人して夜なべして三十六丁の豆腐を作って、朝はよ、庄屋さんの屋敷に持っていったと。

「庄屋さん。注文の品物、持ってききたいの。」と言うたら、庄屋さんが中から飛び出してきての「どうらどうら。」と見たら、箱の中から豆腐取り出しての、

「ここに三十六丁の豆腐がありますいの。一里てや三十六町なんだんが、これでいいですこてやの。」と婆さが言うたと。庄屋さんは、

「おおでかした。でかした。爺さは帰つていいぞ。婆さはちっと上がれ。」そう言うての、婆さを庄屋さんの家にあげたと。婆さは、「はい、はい。」言うての、手ぬぐいを外して板の間に座つてべた一つとしてたれば、奥から庄屋さんがの褒美をいっぱい持ってきて、婆さにくれたと。これでいきがぼ一んとさけた。

むかーし、あったてんがの。

昔てやの、人間の寿命も動物の寿命もみんな神様が決めてられたがらと。

ある時、馬が神様ンとこ行っての、「神様、神様。俺の寿命は何年もられるろっかの。」と聞いたと。すると、「お前には、三十年の命をやろう」と言われたと。

馬は考えていたろもの、「三十年かの、おらあ三十年もいらねえの。毎日毎日、重てえ荷物ひっぱらされたり、どろどろの田んぼに入って、掻け掻け言われるし、人間乗せて、けつ叩かれて、早よ走れ、早よ走れて言われておもっしょくもねえ。おら、十年もあればたくさんだいな。」と言うて、十年だけもろうて、二十年置いていったと。

次に、犬がきたてんがの。犬も、「神様、おら、命何年もらせるろかの。」と聞いたら、

「三十年だ。」と言われたと。犬も考えてたろもの、「いや、おらまあ、毎日毎日、留守番させられて、そうして泥棒が来るがねえかと、夜中じゅう起こされているし、そんで人間が残したもん食（か）せられて、おもっしょもねえ。（今の犬は違えまするもの。）だんだんが、おらまあ、十年もろうて、二十年おいていくいの。」と言うて置いていったと。

次に、猿が来たと。猿も「何年、もられるろっかの。」と言うたら、やっぱり神様は平等に三十年。猿も考えていたろうもの。「三十年かの。おらの、見るなだの、聞くなだの、しゃべるなだのなんか言われてての、おらあ毎日、おもっしょねえでしょうがねえ。おら、十年もらえば沢山だいの。」と言うて二十年置いていったと。

次に、人間が来たと。「神様、神様。何年おらの寿命もらせるろっかの。」「お前も三十年だ。みんなに三十年だ。」人間は考えたと。「三十年かの。俺（おら）の。やっと、三十になって嬢（かか）もろうたか、もろわんかぐれえがんにの、もうちっと、もろわれねかの。」「そうか、そうせば、馬がいらんと言うた二十年があるすけ、それくれるこて。」

そいで、馬の命もろて、五十年の命を人間はもろたろもの、人間てや、欲が深いんだんがの、「五十年かの。五十てや、やっと孫が生まれての。孫がかわいてしょうがねがね。もうちっともろわれんろっかの。」「そうせば、犬がいらねて言うて置いていった二十年もくれるこて。」

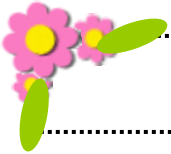
それで、五十年に犬の二十年も、もろて七十年。だども、人間てや、まあ、どこまで欲が深いこんだか、「七十年かの。七十といえは、孫もでっこなるし、やっと俺がこれからやりたいこと、温泉へ行ったり、ゲートボールしたり、あっちの旅行、こっちの旅行とツアーにも行きていしの。」と言うだんが、「そうせば、猿の二十年もあるすけそれもくれるこて。」

そうして、猿の二十年も足して、九十年の寿命をもろたがらと。

三十までは、ほんのきに神様がくれなすった年なんだが、毎日毎日が充実して成長もしていくろもの、三十から五十までは、馬がいらんと言うておいていった年らんだんが、馬車馬のごとく、働いて、ローンもあるし、まあ稼ぐろも、いっこう、銭（ぜん）も残らんがらと。五十から七十まではの。犬がいらんと言うておいていった年らんだんがの、毎日毎日、孫の面倒を見ながら、留守番して、孫が残したもん食うたり、こぼしたもん拾うて食うたりしているがんだと。（まあ今はどうだがわからんがの。）七十から先は、猿がいらんと言うた年なんだがの。なんだか目がかすんでよう見えね。まあ、今はいいめがねがありまするもの、昔は

そんげなもんもねえすけ、よう見えね。それに耳もだんだん遠なって、よう聞こえんで。今、なんて言うた、かんで言うた、よう聞えねなんて言うてんばならん。だども、口だけは達者での。いらんこと、言うては若いもんに煙たがられているがらと。これでいきがポンとさけました。

2015年10月31日第10回長岡民話百物語にて



いきいき☆活動報告

いよいよ出版間近！「語り継ぐ長岡の伝説」

大貫 もと

「伝説について、もっと知りたいね。語りたいね。」という気持ちは、以前からも会の中にあっただと思いますが、具体的に「伝説集を作ろう」という話しが出たのは、今年の百話語りの後からでした。

「私の民話かたり」ですっかり気をよくしていた会としては、最初から、いろいろな難題に出くわしました。

まず、民話のジャンルに含まれる伝説と昔話はどこが違うのか。そして、長岡民話の会として伝説集をまとめるというその目的はなんなのか。また、そのまとめ方はどのようにしたら良いのかと頭を悩ましながらの作業となりました。

伝説と言うからには、史実としてしっかり残っているもの。例えば、具体的な人名、年月日、又、ゆかりの品物（記念碑なども含めて）が残っているものに限った方が良いのでは、とか、長岡民話の会として出すからには語り口調もある程度統一した方が良いのでは、とか、いくら史実に基づくと言っても、伝説として残ってきたからには、それに関わってきた人々の思いがあるはずで、それをどう表現していくか、とか、e t c . . . 。

そして、会員の皆様から出していただいた原稿や編集委員の調べた原稿をもとに現地調査に行ったり、何回も話し合いを重ねました。

その結果、長岡旧市内11話、川口地域2話、小国地域2話、越路地域2話、与板地域2話、寺泊地域3話、三島地域2話、和島地域2話、山古志地域2話、栃尾地域2話、中之島地域3話。合計33話の伝説を載せて、7月末には出版できるところまでできました。

ところで、編集委員としての大きな反省点は、会員の皆様に途中経過報告が滞ったこと、そして、多くの会員の皆様から関わっていただくことができなかったことです。

しかし、幸いにも長岡に伝わる伝説は、まだまだ沢山あります。今回の反省点を活かして伝説集の2巻目、3巻目へと取り組んでいけたらと思っています。

最後に、この伝説集を出版するにあたり、高橋先生の的確なご指導、青柳会長の高い見識、今井事務局長の多大なお骨折りなくしては、できなかったことを付け加えさせていただきます。



発行者： 長 岡 民 話 の 会

連絡先：0258(22)1866(今井)